

是彼會員

五合庵

建国大学第5期生 佐藤善二（會員）

1796年（寛政8年）39歳の良寛は、諸国行脚の旅を終えて、故郷越後に帰ってきた。国上山近在の村々を転々としながら、翌年40歳で国上山、中腹にある国上寺の五合庵に定住し、これより20年間の長きにわたり、この五合庵に住まう人となった。

策策たり五合庵
 実懸響の然るが如し
 戸外竹一叢
 壁上偈幾篇
 釜中時に塵有り
 竈裏更に烟無し
 唯だ東村の奥有りて
 仍に敲く月下の門

いざこゝに、我が身は老いん

あしびぎの国上の山の松の下庵

これからの老い先を、この地に埋めようとする悲壮なまでの決意がこめら

れた良寛の歌である。

五合庵は国上寺の中興の祖といわれた万元恵海という和尚の晩年隠棲の地で、一日五合の米だけの簡素な生活をしてきたことにちなんでそう呼ばれていたという。

五合庵に私が訪ねたのは初秋の午後の日であった。降るような蝉の声を浴びながら、人に案内されて国上寺からうす暗い程の杉の木立の中のダラダラ坂を下ると、ふと右側に急に視界が展げ、そこに百坪ばかりの平地があつて、五合庵の茅葺きが静かに建っていた。

私は老杉の下に佇んで、ゆっくりこの簡素な茶室風の小さな茅葺きと相對したことを忘れることができない。

良寛はここで20年もの歳月を過ごした。深山幽谷のわび住まいというけれども、冬の厳しい寒さに耐え、雨雪の嵐の烈しい夜の孤独や寂寞に苦しんだことだろう。そういうえば良寛の詩の中

には、雪や、雨の夜をうたった詩が多い。食べものは托鉢でえた最低の生活だった。これぞ正に、自分の生命を極限までせらした命がけの求道一筋の生活であつたわけである。無限に流るる時間、無限に広がる空間を真に実感し、その中に自らの存在をおいて人間の生を追いつめた極限ギリギリの生活だつたに違いない。

山かけの岩間をつたう苔水の
 かすかに我は澄みわたるかも
 こうして、良寛という人間は醇化され自然に近づいた。

つきて見よひふみよいむなこの
 とをとをと納めて亦はじまるを
 時の悠久を感じたあまり良寛は、時の流れの連環を悟った。

そして、
 沫雪の中にたちたる三千大千世界
 またその中に沫雪で降る

大空から降り来る沫雪を眺めて、宇宙の果てしない神秘な広がりを夢想した。そして、自らの生命も、こうした宇宙生成の造化の作用それ自体なのだ。山川草木、溪声山色の大自然も、人間も、造化の一大作用で、それ以外のものではない。自分は自然と一体となつて生きるとき、初めて真の純粹な人間

となる。求道とは、そうしたものだ。良寛は悟つたのだろうか、等々ここで生きた良寛の内面を、私は私なりに思いめぐらし一時を過ごした。

生涯瀨立身 生涯身を立つるに瀨し
 騰々任天真 騰々天真に任す
 囊中三升米 囊中三升の米
 炉辺一束薪 炉辺一束の薪
 誰問迷悟跡 誰か問わん迷悟の跡
 何知名利塵 何ぞ知らん名利の塵
 夜雨草庵裡 夜雨草庵の裡
 双脚等閒伸 双脚等閒に伸ばす

この詩はそうした悟りの上に立った正しく良寛の実人生の実感で、良寛の詩の中で最も有名な詩であり、この詩に良寛という人間のエキスが凝集されつくしておると私は思う。

第一にすべてを抛つた無欲、無所有の心根とシンプルな最低生活
 第二に天地の中におかれた自らの命と自然との合体

第三にそれによって得られた自らの充実した心の自由平和な状態
 これこそ良寛が生涯求めつづけたものではなかったか。五合庵の辛苦20年の修行は良寛を極限まで純化しぬいて天地の中の自由人に高めたものと私は思う。

草の庵に足さしのべて小山田の

山田のかはづ聞くがたのしき

むらきもの心楽しも春の日に

鳥のむらがり遊ぶをみれば

これらの歌は、正に求道によって、人間純化の極に達し得た人にして初めてよめる自然との融合の歌というべきであろうか。

良寛は、この五合庵より、しばしば村里に托鉢に出かけて山を下った。つらかった冬を漸く過ぎし春を迎えたときの良寛は、待ち切れずして里に出かけて行ったことだろう。

この春に手まりつきつゝ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし

それで里人から仕事もせんで遊んでばかり暮す糞坊主めと、白い目で見られたかも知れない。

我打てば、渠且つ歌い

我歌えば、彼之を打つ

打ち去り、又打ち来る

時刻の移るを知らず

行人我を顧て咲い

何に因ってか其れ斯くの如きと

頭を低れて、伊に応えず

道い得ても也た何似ぞ

箇中の意を知らん要せば

元来祇だこれれ

良寛は、私はただ頭を下げるばかりで答えられない。答えても、本当の気持ち伝わるものか。ただ、だまって手まりをつくだけだ。手まりをつくのも座禅そのものの境地だ。純粹人間の自然になせる遊戯の境地とでもいわなければならぬ。

今日、良寛について、解良栄重という人の書き残した、『良寛禅師奇話』という原本が、新潟県分水町の解良家に現存しておるといふ。それには良寛の人柄について次のように伝えている。

「師、余方家ニ信宿日ヲ重ヌ。上下自ラ和睦シ、和氣家ニ充チ、帰去スルト云ドモ、数日ノ内人自ラ和ス。師ト語ルコト一タスレバ、胸襟清キコトヲ覚ユ。師更ニ内外ノ経文ヲ説キ、善ヲ勸ムルニモアラズ。或ハ厨下ニツキテ火ヲ焼キ、或ハ正堂ニ座禅ス。

其話、詩文ニワタラス、道義ニ不及、優游トシテ名状スベキコトナシ。只道徳ノ人ヲ化スルノミ。」

良寛の完成された人柄や、資質や人間性は如何に人々を無為のうちに化したかの実証となる記録である。

ところで、昭和47年に「週刊朝日」

が「読者が選ぶ日本の50傑」という企画を打ち出し実施したことがある。その中に、徳川家康、豊臣秀吉、織田信長、福沢諭吉、坂本龍馬等々、日本歴史の中の著名な人々と共に、親鸞、日蓮、弘法大師、道元、などと並んで良寛が選ばれていたことをある本が紹介していた。以来30年、今日良寛研究が

愈々進み、多くの本が世に出て、正に汗牛充棟の有様で大ブームを巻き起こしている。いわば一介の越後の寒村に生まれた田舎坊主良寛が何故これ程、今日の日本人の関心を呼んで多くの尊

敬を集めているのだろうか。私には不思議でならない。これは何故だろうか。やはり我々は、良寛という人間や生涯から我々の心にふれる何かを感じさせられ、それが不思議に、我々のところに感銘と共感を呼ぶ何かがあるからに外ならない。良寛の詩や、歌や、書には今の時代が喪失しておる何かがあった、それが我々に喪ったものを呼びさますキッカケとなる確かなものがあるからであろう。飽食の時代というけれど、利便と快活さのかげに、最近の世相は、まことに殺伐、不確実、不安な時代となっている。我々は、ここで立ち止まって、もう一度人間の「生」に

ついて根本的な見直しをする時期に来ているのかも知れない。極貧の中にあっても、自ら充分に生のよろこびにひたり、自由に、伸び伸びと生きた晩年の良寛の生き方が、現代の濁きにも似たこころした我々の要求に何らかの示唆を与えてくれると思われるからに外ならない。

私はこころした思いで、本稿をまとめた。質素で、善意で、心にやさしさや豊かさを持つ日本及び、日本人の復活を願いながら。

(注) 本稿は建国大学7期生会誌『朋友們』第10号に依頼されて掲載したものである。従って読者は限られており、このまま埋もれさせてしまうのは惜しいと考え、敢えて「善隣」誌に取り上げてもらい多くの会員の方々にお読み頂きたいと存じるものである。日本人にとって「良寛」とは何者であるかを理解して頂ければ今日の不確実の時代を乗切るいくらかの参考になると思う。(平成30年5月 筆者)

〔写真表4に掲載〕